

平家の遺跡 彦四郎の涙石



写真は「沼田歴史散歩」平成 28 年発行より
(現在、道路工事により完全に除去されて存在しません)

云われ

むかし、むかし、平の清盛さんの全盛の頃でございます。

この草深い奥畑織城の山里に僅かな供人を連れた見慣れない人達がやって来ました。然し、この人達は、只の人ではないようでした。都言葉を使い、又、衣服もきらびやかで万事派手に振舞いました。

しばらくの間に、立派な住まいが出来、次々と供人の数も増えて来ました。

何でも都のさる高貴な方のご子息ですが、事情があつて都に住むことは都合が悪く、平家の最も親交のある巖島の神主、佐伯影弘の庇護のもとに巖島に程遠からぬ奥畑の山里にかくれ住む様になったと言うことでありました。

だから、この人達の主人というのは、まだ年端も行かぬ幼いお子さんと言うことになりますね。

静かな、平穏な年月が流れました。

山里とはいえ、時には鼓の音や、笛の音も聞かれました。

都のしきたりに似た、堂上、堂下の住まいの区別も出来ました。局（ツボネ）の名も聞かれます。

舍人（トネリ）の住まいも出来ました。

何々の庄司といわれる武士の名も聞こえます。（これ等の名前、堂上、堂下、つぼね、つづみ、とねり、庄司、等の名は今もいろいろな形で残っています）。

しかし、おごる平家は久しからずとか、全盛を極めた平家の一族も清盛を境にして、次第に衰えて参りました。

一ノ谷に、屋島に、そして壇の浦の戦いには、再起を考える事も出来ない一族総打死の悲

劇でありました。

この悲報は、山深い奥畑幟城の一族のもとにも次々と知らされました。頼みに思う厳島の神主も、どうやらいまでは源氏方であるとか。いやもう既に平家の残党は探し出されて討首になっているとか。その中に源氏の監軍、梶原景時による残党刈りは始まっておりました。

先ず石道(五日市町、石内)の平家城(今市城)次いで串山城もあえなく落城し、平家水軍の搦手組(石内カジヶ谷)を掃蕩して石内と奥畑の境檣ヶ尾まで攻め上がりました。

ここで源氏軍は大休止をして、源平両軍の戦死者の冥福を祈り、供養をいたしました。このところを、源氏大休壇と芸藩通志に記載されておるところです。このあたり、坊主原、千僧原、遺祖先

原の地名があり、沢山の僧による供養が行なわれた事を物語るものと思われます。

一ノ谷、敦盛塚のあるのもこの近くです。

さて、幟城にある平家の一族は、戦々競々、生きた心持ちはありません。先ず、戦うには地の利を考えねばなりません。

それには、上奥畑の陣ヶ丘に陣を敷くしかありません。長年住みなれた幟城の地を、今日を限りに見捨てねばなりません。一族を引き連れて西の方をさして落ちていきます。さすがに気丈な平家の武士彦四郎も、これが最後かと幟城の住まいの見えなくなる所まで来て振り返り、悲しみの涙を止める事が出来ません。こらえきれず泣きくずれます。

この所、彦四郎の涙石のあるところ です。

(現在の涙石は、大正の末頃、道路拡張のため涙石の大半は切り取られ、その面影を偲ぶ由もありますが、わずかにその根元の方が残って涙の跡をとどめています。)

これから、陣ヶ丘に源氏の軍を引き受けて手強く戦います。この陣ヶ丘の下手の所に、矢太鼓の地名が残っています。矢は飛び交い、両軍の陣大鼓はなりひびく、その戦いの激烈な有り様をそのまま残しております。

源氏の白旗は地に満ちています、(白旗の地名)陣ヶ丘はもろくも敗れました。

逃れた彦四郎等、平家の一族は、矢ヶ尾峠までたどりつきました。矢折れ、力尽きた彦四郎等は腹をかき切って相果てました。

この所、ババのふところと言い、幼い平家の公達が、ババのふところに抱かれて、一族と共に死んで行きました。

一基の墓石があります。伝えて平家の武士の墓と言われております。

矢ヶ尾峠の頂上はもうすぐそこです。

(沼田の伝説と昔ばなしより)

藤広 繁吾

郷土史 藤広繁吾さんの記録集より